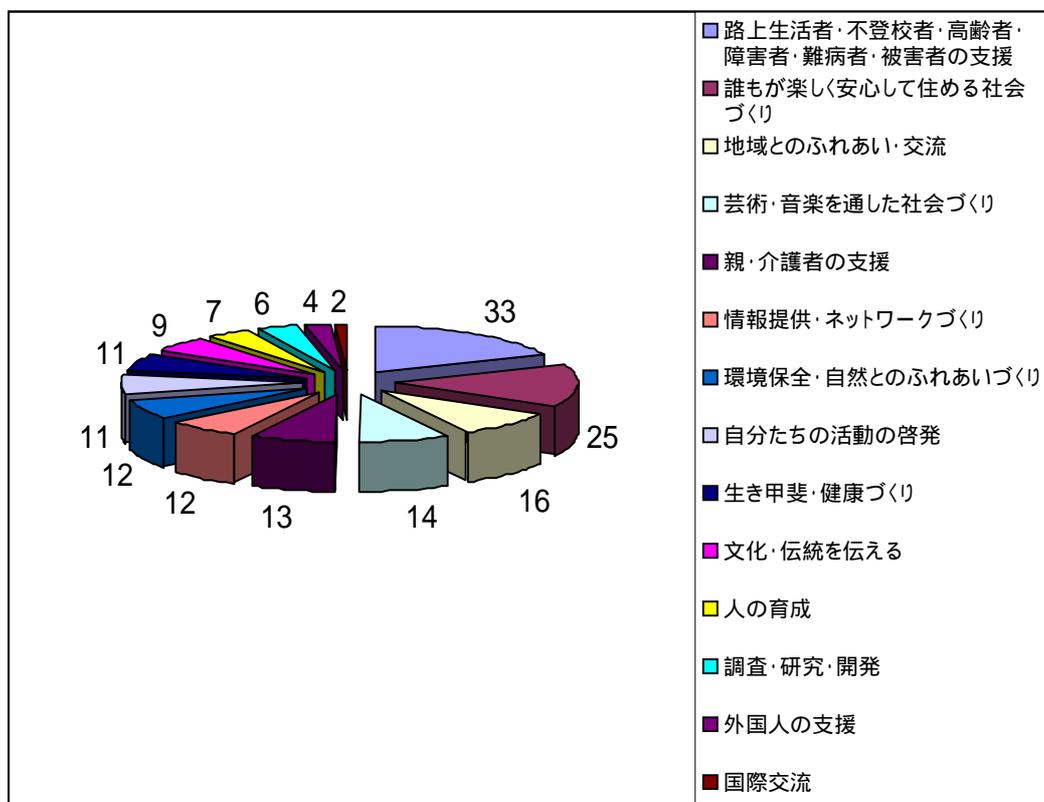


## 資金助成プログラム2003応募プロジェクトのテーマ分析

## プロジェクトの目的



プロジェクトの目的別に分類すると上の円グラフのような結果になった。

結果は、福祉といえば・・・というようなテーマの『路上生活者や高齢者や障害者の支援』が一番多い。ただ、その内容は、社会的弱者と見なして支援するのではなく、その人たちが自立していくための支援といった目的のプロジェクトがその大半を占めた。また、中には当事者による活動も含まれている。つまり数年前のいわゆる措置型福祉ではない方向に向かっていることが分かる。

その流れで、2番目に多かった『誰もが安心して住める社会づくり』もその傾向を示している。対象を高齢者や障害者に限定せず、“誰もが”安心して住めるという動きが NPO に広がってきているのではないかと。

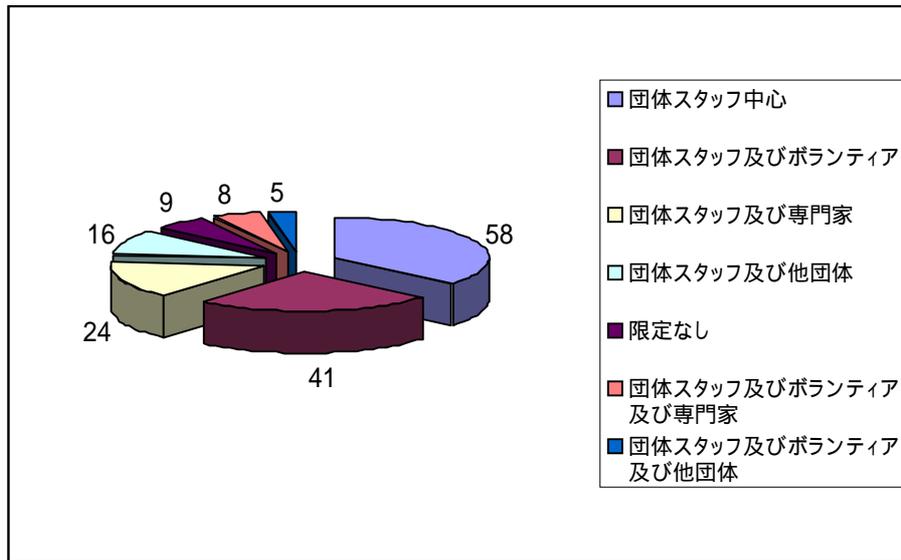
この2つに共通する考え方は、[すべての人が基本的人権を尊重させながら社会で自己選択と自己決定に基づいて生活できるとする考え方 = ノーマライゼーション]である。

この結果から NPO は、弱者救済の思想からノーマライゼーションの思想へ移っていることが読み取れる。

地域でのコミュニティ再生を目指す動きが出てきていることも指摘できる。3番目に位置する『地域とのふれあい・交流』もそれに当たるし、『生き甲斐づくり』や『文化・伝統を伝える』などでは高齢者の方達が積極的に地域の活性化に尽力している。超高齢社会を迎えるにあたり、高齢者自らが NPO の活動を盛り上げていくという動きが出てきているのではないだろうか。

すべてにおいての共通点を探すとすれば、それは[つながり]である。申請書を何度も読み返していても、ほとんどの団体が様々な形で[出会い]や[つながり]を欲していることが感じ取れた。

## プロジェクトの推進体制



プロジェクトの推進体制についても分類してみた。

申請書によって詳細に書いてあるものと、そうでないものがあり、正確な把握は難しいが、いくつか気づいた特徴をあげたい。

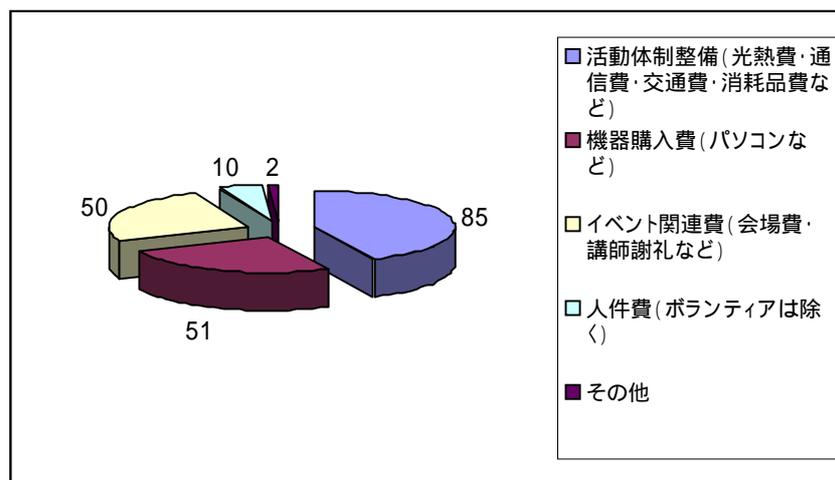
まず、何かしらの専門家と一緒に活動している団体が多いということである。団体自体の設立に専門家が中心的な役割を果たしていることが多いと言ってもいい。

本来の仕事(本業)の場での活動には、何らかの限界があり、もう一つの活動拠点や活動の場が必要だと考えている専門家が多いことが伺える。そうした場として、NPO(市民活動組織)は効果的な仕組みになっていると言えるだろう。その魅力として、現場との距離感や自由な活動、専門外の人たちや他分野の専門家とのつながりや協働など、さまざまなものが考えられる。NPO活動が、異質な専門家をつなげ、細分化されがちな現在の社会システムを組み替えていく契機になることも期待できる。

ボランティアの利用についてもさまざまなスタイルが感じられた。資金力が乏しいNPOにあってボランティアの役割は重要である。ただ、全くの無償ではなかったり(交通費や昼食代は出る)、無料の人手といった扱いではなく、一緒に楽しむ人たちといった捉え方のボランティアも出てきていることを、申請書を読み改めて強く感じた。

一番意外であり、喜ばしかったのは、『他団体と一緒に』というプロジェクトが少なからずあったということである。自分の活動のみといった閉鎖的な展開ではなく、広い視野を持って他団体と連携し合い活動する。これも最近のNPOの特徴の一つかもしれない。

## プロジェクトの資金支出計画



資金支出計画については、大まかに『活動体制整備(光熱費・通信費など)』『機器購入費』『イベント関連費』の3つに分けた。『人件費』については読み取りづらい部分もあったので、正確さはあまりない。

厳密に分類できなかったために、複数の項目に入れて集計したものもあるため、広義に捉えられる『活動体制整備』が一番多くなっているが、それ以外の具体的な項目としては、『機器購入費』『イベント関連費』の2つに分類されている。そして、その2つは数もほぼ同じである。『機器購入費』『イベント関連費』とも、どの団体も似たような資金計画であったため、特に読み取れる特長はなかった。

ただ、書き方として、金額に対する内容を詳細に書いてくる団体は少なかったように感じた。資金計画や資金管理は、まだ多くのNPOにとっては不得手の課題であることが伺える。しかし、NPOが自立し発展していくためには、資金管理は重要であり、これからの大きな課題になっていくだろう。それぞれがもっと意識を高め、力を強めていくことが必要である。

(分析:橋本典之)